2008－IV-25

国際安全保障における
地域メカニズムの新展開

望月克哉　編

2009 年 3 月

独立行政法人　日本貿易振興機構
アジア経済研究所

調査研究報告書
新領域研究センター　2008－IV-25
「国際安全保障における地域メカニズムの新展開」研究会

調査研究報告書
新領域研究センター　2008－IV-25
国際安全保障における地域メカニズムの新展開

2009 年 3 月 30 日発行
発行所　独立行政法人　日本貿易振興機構
アジア経済研究所
〒261-8545　千葉県千葉市美浜区若葉 3-2-2
電話　043-299-9500

無断複写・複製・転載などを禁じます。

はじめに

近年、世界の各地域では安全保障分野における新たな制度化の動きが生じつつある。冷戦終焉後の地域紛争の激化、あるいは 9.11 以降のテロとの戦い、こうした安全保障分野で浮上してきた新しい課題への対処のため、これまでとは異なる仕組みや枠組みが求められたことが一つの背景をなしている。他方、新たな制度化には、地域主義の新展開としての一面があり、それはまた今日における地域概念の変容を物語っている。本研究会では、こうした新たな展開に注目して、そこで生まれた地域的なメカニズムを分析対象とする。それらが実現に至った経緯や展開過程を明らかにするとともに、将来における可能性と限界についても考察することを目指している。

われわれが国際安全保障における地域メカニズムと称しているものは多岐にわたる。たとえばアジア太平洋地域における安全保障メカニズムと称すべきものを例にとれば、まず米国を中心とした二国間関係を軸とする伝統的な安全保障協力の仕組みをはじめ、より広域的に制度化されてきた多国間安全保障協力、関係国や域内国による問題解決指向型の枠組み、さらにはアドホックな協力関係といったものも多数存在しており、それぞれに多様な展開を見せつつ、取り組みを深化させていると言えよう。こうした国際安全保障の多層的な構造、いわゆるアーキテクチュアを理解することも欠かせない作業である。地域メカニズムの形成・発展の契機を明らかにしつつ、併存している仕組みの相互作用への目配りといったものも必要であろう。

本研究会では東アジア、東南アジア、ラテンアメリカ、アフリカというように対象地域を設定して各委員が分担する体制をとっている。これらの地域を参照範囲としながら、それぞれで展開する地域メカニズムの広がりや機能面での特徴を捉えることを企図しているからである。もとより既存の地域を所与のものとしているわけではなく、そこに生じているダイナミズムを捉え、あるいは新たな地域化の動きをも視野に入れてゆくことになる。とは言え、域内諸国が国際安全保障という観点から展開している地域連携、さらには地域秩序の模索といった動きが主たる関心であることもまた事実である。共同研究会として各委員が議論を交わすなかで、域外からの見方、あるいはグローバルな視点の付与が期待される。

第１年目の 2008 年度は、委員それぞれが有する問題意識を共有し、醸成することを研究会の主眼とした。各委員に当面の問題関心を表明していただくことに加え、専門家からのヒアリングを通じて問題関心を広げる作業も行った。年度前半には、防衛研究所の湯浅剛主任研究官をお招きし、「中央アジア情勢と中ロ主導レジームの展開」のテーマで、とくにロシア主導の地域協力レジームと呼ぶべきものについて議論を行った。また年度後半には、アジア経済研究所の海外客員研究員として来日中であった中国現代国際関係研究院の馬俊威日本研究所副所長から「中国の安全保障政策」を中心に、その課題

と目標を概説していただくとともに、日中関係の展開についても話を伺うことができた。これらヒアリングにより研究会としてのスコープが広がったことは言うまでもないが、地域的にカバーできていなかった旧ソ連・中央アジアを含むユーラシア内陸部を担当する委員として湯浅氏が加わって下さったことは何よりの収穫であった。

本報告書は、上述した１年間の活動を経た時点での各委員の問題関心をとりまとめた論考を掲載している。これは来年度に進める予定の分析作業に先立ち、事例の紹介とともに論点の整理を試みたものである。これら中間成果の公開を通じて、同様の関心を有する方々からのインプットを期待するものである。

2009 年 3 月　編者